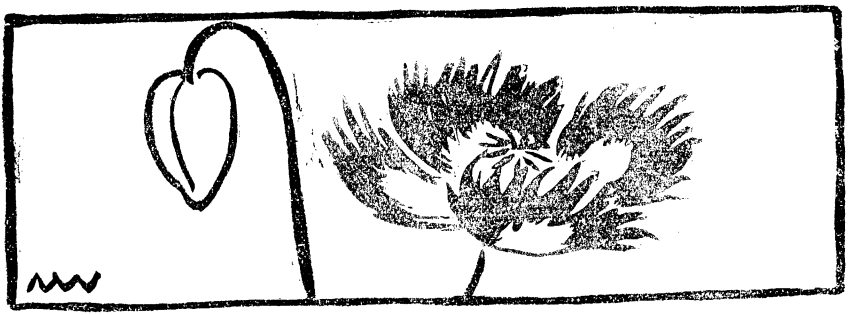

小藤

田村俊子

一

小藤は、明るく日の射す方を向いて、うつとりと何か考へ込んでゐた。硝子窓を通して赤い山茶花の花がちらりと見える。其れが水の中に浮いてる花のやうに冷めたくちり〳〵と萎れてゐる。手水鉢の傍に咲いてゐる山茶花であつた。

外には青い空を吹き剝がしそうな風が荒ら立つてゐる。冬の氣象が癇癪を起して、まだ樹々に殘つてゐる秋の末のものを一時に滅盡させやうと勢つてるやうであつた。庭の散り紅葉が飛石の上をから〳〵と吹き飛んでゆく微な音が聞こえる。籠桶の中の鶯がかたことと激しく動き廻つてゐるので、小藤は鶯を氣にしてそつと障子を開けて見た。暗い籠の奥の方に鶯は縮まつて、小藤が見詰めてゐる間に其れなりで動かずにゐた。

「寒いのかも知れない。」

其れで小藤は、紫壇の臺ごと鶯の籠桶の障子を窓から射す日の方へ振向けてやつた。暖ら〳〵と水の流れの影のやうに日が籠桶の上を這つた。

小藤は又、窓の方を向いてさつきからの思ひを續けた。眞つ黑な漆のやうな濃い髪を引き詰めて鬢下地にしてゐる。毛が多いので兩方の輪が彈けるやうに兩鬢の上に垂れてゐる。鬢を詰めたので眼と眉が一層きり〳〵と上つて、二重瞼の眼元が凛として張つてゐた。細く長い眉尻もやゝ一字に延びて、鼻筋が眞つ直ぐに通つてゐる。額の線、頰の線、腮の線、鼻の線――何處までもすら〳〵と柔らかに描いたやうな和やかな輪廓を持つたその顏は、少し唇が厚くて重そうにぽつとりとしてゐる。額がせゝこましい程狹いのが少し相を窮屈にしてゐる。色はあんまり白くはなかつた。其れでも何所かに白粉が殘つてゐて、其れがこの眼の仇つぽさを添へてゐた。

「藤こう。おい。」

とお爺さんの呼んでる聲がする。

「私を呼んでるよ。」

小藤は直ぐに氣が付いたが知らない振りをしてゐた。

「おい。誰れか藤こうを知らねえかえ。」

お爺さんが大きな聲で、女弟子の集つてゐる部屋のあたりで聞いてゐる。

「お嬢さんは離れの方にゐらつしやいますでせう。」

大層よく透き徹つた聲で其の一人が返事をしてゐる。小藤はその聲を聞き付けて、
「華江さんだよ。」
と獨り言を云つた。
「ほんとに煩さいお爺さんだよ。誰れが知るもんか。」
小藤は然う云ひながら懷ろ手をして暗い壁の傍にぴつたりと附着いてゐた。平氣でゐやうと思ひながら、お爺さんの足音が椽側にひた〳〵と聞こえてくると、小藤は思はず眞つ赤になつて、其の胸が波を打つた。
「何だえ。こんなところに引つ込んで。」
障子を開けて顏を出したお爺さんの笑つた顏を見ると、小藤はすつかり血の引いた蒼白な顏になつて其の張りの強い大きな眼に爆ぜるやうな冷笑を漂えた儘動かずにゐた。
「おい。」
お爺さんは骸骨のやうに窪んだ眼を上げて、口を四角に開きながら笑つて入つて來た。お爺さんは脫腸を病つてゐるので、始終革帶の先きにピストルのやうな形をした止めの附いてるものを腰の廻りに卷き付けてゐる。其の腰帶の止めに手をやつて、着物の前を引き摺りながら素足で小藤の立つてる方へ歩み寄つた。
「おい。藤こう。」
お爺さんは小藤の立つてゐる身體を片手で抱きよせた時に然う云つて呼んだ。

「なに。お爺さん。」

小藤は抱かれながらお爺さんの顔を上目でぢつと眺めた。お爺さんの乾いた唇が筋肉の緊張で引絞るやうに窄まり、白髪の月代が針のやうに延びた其の頰の肉は、脂肪が浮いて戰えるやうに撓んでゐる。だがその顔が又直ぐに笑ひを浮べた。窪んだ眼が一層深く落ち込むやうに、お爺さんは笑ふと其の小さな瞳が、眼瞼で被ほはれた。お爺さんはその眼瞼の下から小藤の顔を覗くやうに仰向いて、又、

「藤こう。」

と呼んだ。そうして小藤の柔らかな肩の肉を摑んで搖がしながら、

「俺がさつきからお前を呼んでるのに、知らん顔をしてゐると云ふ奴があるかえ。」

とお爺さんは態と怒つたやうに、又口許を窄めて、半纏を着てゐる痩せた肩を自分で振り動かした。

「聞こえないもの。知りませんよ。」

小藤はお爺さんの手からするりと摺り拔けて鶯の籠桶の傍へ來た。

「おい。」

お爺さんの然う云つて小藤を呼ぶ聲は、干枯らびた內臟の血が渦卷くやうに、身體の底の方から苛ら立しく縺れて響いてくる。その度に、お爺さんの下半身は拔けて行くやうにがつくりと動いた。

「おれはお前が可愛いくて仕樣がないんだ。」

お爺さんは呟きながら小藤を追つて籠桶の傍へ來た。小藤はその臺にうつとりと凭れて、傍へ來たお爺さんを見上げながら笑つてゐた。小藤はいつか甘えるやうな媚弄を含んだ眼になつて、其の豐くりと

した丸い腮に掌を支つてゐた。
「然う。お爺さんは鶯の方が可愛いゝんぢやないの。」
「鶯よりはお前の方が可愛いゝんだ。」
お爺さんも其所に坐つて小藤の頰を指の先きで突いた。
「でも鶯はね。うまく行くと百圓にも百五十圓にもなるんでせう。」
「然うよ。たつた二十圓の鳥が千圓になるかも知れない。然うしたら藤こうに指環を買つてやる。」
お爺さんは、其のぬら付いてゐるやうな黑い光りを帶びた指先で、又、執拗く小藤の頰を突いた。
「おゝ痛い。」
小藤は今度仰山にお爺さんの手を拂つた。
「どんな指環を買つてくれるの。」
「然うよ。赤いのがいゝだらう。」
「あれは、ルビーと云ふのさ。」
小藤は自分の指を眼の前で眺めながら云つたが、その手を懷中に入れてしまつてお爺さんに顏を背向けた。
小藤の胸に重い鬱陶しさが滿ちてきた。このお爺さんの黑い皺んだ手に、自分の身體を縛められてるやうな物憂さに小藤はくさ〳〵として、その美しい顏を袖で掩ひながら籠桶の臺の上に突つ伏すと、
「お爺さん。この鶯に唐琴と云ふ名を付けると好い。」

と云つた。

「洒落たことを云つてる。」

とお爺さんは、さも小藤の云つた事を可愛しむやうに他愛もなく蕩ろけた調子で云つて笑つた。小藤は默つて何時までも突つ伏した儘で、鶯塚の芝居の事を考へ耽つてゐた。可愛らしい梅が枝の見染めの場。梅ヶ枝の古風な戀煩ひ、——

「これ唐琴。ほんにそなたは結ぶの神。」

小藤は臺詞を云ひながら顏を上げて笑ひ出した。

「私が梅ヶ枝でお爺さんを見染めるの。其れから戀ひ煩ひをするんですとさ。」

小藤は胸を打ちながら笑ひ轉げた。目が眞つ赤になつて涙が浮いてゐた。その涙を小藤は緋の繻絆の袖で拭ひながら、まだ口を歪めて笑ひつゞけた。

「うむ。」

お爺さんも、口を四角に開きながら咽喉を痙攣らせて笑つた。

「仕樣のねえ奴だ。」

お爺さんは然う云つて、突然小藤の鼻の先きを摘んだ。

二

夜になると弟子の華江も咲子も歸つてしまつて、家の中は一層陰氣に森となつた。何かしら淒つてゐ

なければ師匠の不二江の機嫌が悪るいので、小藤は三味線を出してきて音をさせてゐたが、やがて倦さ〳〵したので其れも傍へ抛り出して、ぼんやりと火鉢にあたつてゐた。

小藤は取り留めもなくいろ〳〵な事を考へてゐた。こんな家に貰はれて來た自分は、この先き何うなるのだらうと云ふ不安を毎日小藤は惱んで、少しも心が安靜かずにゐる。琴をやつても踊りをやつても、何をやつても一々不二江の心に叶はなくて、絶えず其の烈しい小言を聞かされてゐる小藤は、一とつ一とつ自分の藝事にも失望して、然うしてこの頃では却つて捨鉢な氣になつてゐた。

「私はちつとも名人なんかになりたくない。なんにも出來ない平凡で終つたつて構やあしない。」

小藤は斯う思つて、一々自分に嚴しい小言を云ふ師匠の不二江に反抗をもつ時もあつた。立派な技藝を有つことばかりに苦しんで、今日まで長い年月その藝道の上で鬪ひ續けてきた師匠に對しても、小藤はなんにも其人を別段に敬ふと云ふ意も起らなかつた。狐火の八重垣姫の型に苦心して、月の照る晩に池に自分の姿を映しながら其の形を考へたと云ふ師匠の話も、小藤にはその苦しむ心と云ふものが解らない。

「自分から苦しまなくちやいけない。」

斯う云ふ師匠の言葉は小藤には何の意味もなかつた。

「いまに、自分で舞臺を踏むやうになると、私の云つた事が分るやうになる。聞いておくだけでも藥だよ。」

小藤はそんな時には柔順に不二江の前で首肯いてはゐるけれ共、心ではそんな事は何うでも好いと云

ふ風に考へてゐた。現在、自分の眼の前に見てゐる師匠の生活は、今更それほどに小藤の若い胸に憧れも持たせなかつたし、その人の藝道に對しても、自分がどんな苦しい思ひをしても其人の行つたところまで辿つて行つて見やうと思ふ程の敬虔な心も起らせなかつた。そんな事よりも、小藤は自分一人の上にもつと考へることがあるやうな氣がした。其れは何時までも斯うしては居られないと云ふことであつた。

「何時までも斯うしてはゐられない。何うすればいゝのだらう。」

小藤が斯う云つて師匠の不二江に聞いた時、不二江は、

「其れだから私云ふ事を聞いて、凝つとしてゐれば好い。私の云ふ通りに勉強さへしてゐれば好い。」

と云つた。だが今の小藤にはこの言葉ほど不安を感じさせるものはなかつた。斯う云はれゝば云はれるほど小藤は一層心がおちつかなかつた。斯う云つて聞かす師匠は、小藤の行く先きを照らしてくれるやうな何の光りも見せてはくれなくつて、何時も氷のやうに冷めたく默つてゐた。その自分に對して冷めたく默つてゐる師匠の眼から、小藤は兎ても自分のいゝ未來などをトふことは出來なかつた。小藤は師匠から、まだるこい藝を磨く話を聞かされたり、自分の至らない藝を叱られたりばかり爲てゐるのでは少しも自分の行先が見えないやうな氣がした。そうして一年經つても、まだこの家に閉ぢ籠められたぎりで、弟子の華江や咲子よりも小藤はおもしろい世間を知らなかつた。師匠に隨いて芝居へ行く華江や咲子が此家へ歸つて來ては折々派出な世間を話してくれるばかりで、小藤は嬰兒のやうに何にも知らなかつた。お爺さんも不二江も、小藤を決して外へ出さなかつた。稽古の師匠もこの家へ出て來て小藤に

物を教へた。小藤は稀に自宅に湯が出來ないで近所の洗湯へ行く日があると、其れを樂しみにして喜ぶほど、格子の外へも勝手には出られなかつた。

「其れはお師匠さんやお爺さんがあなたを大切にするからですよ。」

とみんなは小藤に云ふけれ共、小藤には其れが自分を大切にされることだとは思へなかつた。そうして華江や咲子が、氣儘に若い男たちとも戯談を云ひ合つて面白い日を暮らしてゐるのを羨しく思つた。

「この頃何所へ行つてもあなたの容貌の美いのが評判で、みんながお嬢さんと話をしたがつて騒ぎですよ。」

と云ふやうな華江の話を小藤は胸を騒がしながら聞いてゐた。自分の眼の周圍にはすつかり金網が張つてあつて、どこの隙からも然うした世間を覗くことの出來ない自分を忌々しく考へたり、自分を一切外へは出すまいと壓へ付けてゐるお爺さんや師匠を疎ましく考へたりした。何時も氷のやうに冷めたく默つて何かを見詰めてゐるやうな師匠と、猥らな愛撫に目を失くしてゐる執拗なお爺さんと、この老夫婦の手に圍まれてゐる自分は、何時になつたら自分の思ふ儘な世間へ出る事が出來るのかと、小藤は今の境遇に若い心を猶更苛らつかせた。

小藤は幼少い時に兩親が失くなつて、祖父と二人で暮らしてゐた。そうして小藤が此家へ貰はれてきてからは、其の手切れの金で、祖父は千住の方の知邊に身を寄せて靜に過ごしてゐた。小藤は何彼につけてこの祖父を思ひ出した。そうして祖父と二人で百姓でもしながら一生を終つてしまひたいやうな無邪氣ない心に祖父を慕つて、涙をこぼす時があつた。小藤は、

「お祖父さんは何をしてゐるだらう。」

と今も其の人を思ひやりながら、火箸で灰を弄つてゐたが、煙草がのみたくなつたので彼方此方と煙草入れを探したが見當らなかつた。

「あつちへ置いて來たんだね。」

小藤は自分を叱るやうに云つて、舌打ちをした。師匠とお爺さんと、紫壇の長火鉢を間にして默然と向ひ合つてゐる茶の間の方へ、其の煙草入れを取りに行く氣にはなれなかつた。

「仕様がないね。」

小藤はまた自分を叱つて舌打ちをした。こんな時に女中を呼んで煙草入れを取りにやれば直ぐに自分が小言を云はれるのが知れてゐるので、何うしやうかと迷つた。あの陰氣な茶の間へ出て行くことは厭だし、煙草は頻りに飲みたかつた。其れでも暫らく我慢をしたがとう〳〵堪へられないで煙草入れを取りに出て行つた。

椽側を踏んで障子を開けると、煙草掃除をしてゐたお爺さんが此方を向いて、

「やつて來たな。」

と云つて笑つた。例のやうに不二江とお爺さんは小さな火鉢の前に向ひ合つてゐた。白髪を染めて、其れを半下地にして毛の先きを切つて前の方にばらつかせてゐる師匠は、その頭髪を横に傾げて、手を膝の上においてお爺さんの煙管掃除の手許を見守つてゐたが、小藤が入つてくると其方を見返つて、そうして珍らしいものでも見るやうに暫らく小藤の顔を眺めた。室の中は丁度幻のやうに、なんの陰翳もな

く、ぼうと一と色の薄暗さが漂つてゐた。黒地の縮緬にいつぱいに繡ひのある褞袍を引つかけてゐる不二江の姿は其の中に綿繪のやうに浮んでゐた。瞼は皺んでも大きく張つてゐる水晶のやうな眼、少し痘痕のあとの見える削つたやうな高い鼻、名人不二江と唄はれたこの面影は、老齢の皺の底にすつかり萎びてはゐるけれ共、舞臺で洗練された美しさは、僅な笑ひの表情にも強い印象の一點が何所かに刻まれた。不二江はお爺さんの掃除のできた煙管を取り上げて、鼻をすうと云はせながら煙草を詰めた。

小藤は火鉢の傍に寄つて自分の煙草入れを取り上げたけれ共、直ぐに出て行くことも出來なくて不二江の傍に坐つた。

「おい。お前を名古屋へ連れて行くとよ。」

とお爺さんが小藤の顏を見ながら云つた。小藤は其れを聞くと下を向いて、「うん。」と首肯いたきりで默つてゐた。

師匠がこの霜月に名古屋へ興行に行くと云ふ話は前から小藤は聞いてゐた。小藤はまだ一度も舞臺へは出た事はないけれ共、何か所作事を一とつ出しものにしてその時に連れて行かうと云ふ相談を師匠とお爺さんがしてゐた事があつた。其れで小藤は、其の話を聞くと自分は何を演るのだらうと心の中で考へてゐた。

「少し、確りしてやつて呉れなくちや可けないよ。おつかさんに恥を掻かせないやうに。好いかい。」

お爺さんは師匠の顏を見ながら笑つて云つたが、不二江は娘形になつた時のやうな仇氣ない態をその撫で肩のところに作つて、兎角う見ると云ふやうに首を左右に動かしながらぢつと火鉢の中の火を見

守つた儘で口を利かなかつた。お爺さんも其れきりで默つたので小藤が立つて來やうとすると、不二江が、

「あの――」

と呼びとめた。

「あした。お兼さんが來たら、鷺娘の地をよくやつて置いてお貰ひよ。」

不二江はまた銀の延べを取り上げながら小藤の方を見ないで云つたが、自分は其の儘立上つて煙草入れを下げながら寢床の敷いてある次ぎの室へ行つた。

「おい。これを持つて行きな。」

お爺さんは煙草盆を取つて其れを小藤の方へ差出した。小藤は其れを持つて不二江の枕許へ置いてくると、お爺さんは自分の傍へ小藤を手招ぎした。

「お前は、鷺娘をやるんだから確りしなくちやいけないよ。」

小藤はお爺さんの其の力の入つた聲に脅かされたやうに心配そうに眉を顰めた。お爺さんはそんな事を云ひながら、もう舞臺の上に立つた小藤の豐麗の姿をその頭に描いて嬉しそうな顏をしてゐた。そうして干涸らびきつた不二江のあの身體と、若やいだ血の生き〳〵と滿ちてゐる小藤の身體とを、お爺さんは例のやうに密かに心の中で比べながら、小藤の手を取つた。その掌を擦ると柔らかな皮膚の接觸が、お爺さんの頭の上から足の爪先までを戰はせてお爺さんはほんのりと醉つたやうな氣持になつた。小藤の若い命、――其れがお爺さんの枯れた命にも青春の響きを打つて、お爺さんは自分の身體がころ

くと彈かれるやうであつた。

「おつかさんよりも奇麗だと云はれるんだぜ。おい。」

お爺さんは小藤の脊中を叩いて云つた。舞臺の上に立つても、その衣裳を通して、小藤のふつくりとした肉の白く柔らかい魅力をお爺さんは想像しながら、すつかり肉の衰へてしまつた不二江がその木彫りの面のやうな顔に鉛ばかりを白く塗る舞臺顔や、骨ばかりで組み立てられたやうな枯れきつた身體の型などを思ひ描くと、壓されるやうな潑溂とした肉の感覺を持つた小藤の方にお爺さんはずつと美しさを思はずにはゐられなかつた。

「若い奇麗なところをすつかり見物に見せるんだ。」

とお爺さんは云つて笑つた。お爺さんはふと、不二江の昔の艶麗な姿を思ひ忍んで何とも云へぬ果敢ない氣になつたが、其れは、小藤の手を再び取つてゐる内に消えてしまつた。お爺さんは不二江の爲に大きな身代も潰してしまひ、女房も子供も捨てゝ不二江と三十年近くも一所に暮らして來たのであつた。

お爺さんの昔の粹な戀には、かうして女の手を取ると云ふやうな戯れた事もなかつた。

小藤はお爺さんの今の言葉が自分の情を唆つてくれるやうで嬉しかつた。それで口を窄めて微笑むと、小藤の眼の下には皺が出來て一層可愛らしい顔付になつた。小藤はお爺さんの肩に自分の頰をつけて甘えるやうにお爺さんの痩せた身體を押し動かした。

「こんだの芝居は大勢若い男がゐるから氣を付けなくつちやいけないよ。大事な藤どうに指でも差されるといけないからおれは附いて行くんだよ。」とお爺さんは小藤に身體を動かされながら云つた。

「指を差すつて何うするの。」
「斯うするのよ。」
お爺さんは小藤の頰を指で突いた。
「若い男がそんな事をしちやいけなくつても、おとつさんは構はないの。」
小藤が眼に笑ひを隠しながらお爺さんの横顔に自分の顔を付けるやうにして聞いた。
「あんな事を云やあがる。」
お爺さんは小藤を轉ばすやうにして長火鉢の傍へ押し付けた。小藤はその下になつて潰されるやうな息の中からくす〳〵と笑つてゐた。亂れた裾の下から赤い色がこぼれて、お爺さんの黒八丈の前垂れの上にもその色が縺れた。

三

その土地へ初めて行くのだからと云つて、お爺さんは不二江に說き付けて小藤の服裝を拵へさせた。近所の小間物屋に注文して、お爺さんの好きな赤い玉の指環も小藤の細い指に箝めさせるやうにした。不二江が然う云ふ贅を面白くない顏をすると、
「これが今度貰つた娘で御座いますと云つて、紹介せなくつちやならない所もあるんだから、少しは當世らしい風もさせなくつちや可けねえやな。」
とお爺さんは師匠を制した。師匠はそれよりも自分の思ふ半分にも小藤が踊れないのが心にかゝつてゐ

た。不二江の娘の小藤の出し物と云つて、特に先方へも書き出してある其の鶯娘が、いくら難かしいものとは云つてもあんな拙い踊りやうでは呼び物にもならないと思つて屈托してゐた。それは全く自分の身にも抱はることであつた。何を苦しんで、あんな藝の育ちの惡るいものを養女にしたかと思はれるのも恥辱であつた。不二江はもう出立つ日が迫つて來た間際まで、火の出るやうに小藤に稽古を付けさせたが、それもこの頃ではすつかり抛つてしまつた。

小藤はよく泣きながら不二江の小言の前で稽古をしてゐた。自分の身體は鉛でも入つたやうに重く、足は吸ひ付いたやうに上らなくなつて、自分でも何う形を付けてゐるのか無感覺になるほど、小藤は苦しく立ちつゞけてゐた。

「おい。確りしなくちやいけないよ。」

お爺さんは小藤が一人で泣いてゐると、その後に來て大きな聲で云つた。

「何うせおつかさんの氣に入るやうには出來ねえに極つてゐるが、それを上手にやらせやうと思ふから、おつかさんも一生懸命なんだ。おつかさんの機嫌に逆らつちや可けない。何でもはい〳〵と云つて置きなよ。」

お爺さんは又、その後では師匠を執り成した。

「どうせ然うお師匠さんの思ふ樣には行くもんぢやないから、好い加減なところで固めて置きなさい。まあ綺麗なところで賣れゝば結構だ。」

お爺さんは、今更若いものを苛責めるやうに藝を強ひやうとする師匠の考へが、無意味でたまらなか

つた。

「少しは今の世間の事も考へなくちや可けねえ。お師匠さんはあんまり今の世間を知らなさ過ぎる。今の世間は綺麗に淺く渡つて行けばいゝんだ。何もそんなに實直で行くことはないよ。小藤だつて然うだ。今更ほんとうに仕込んで見たつて追ひ付くもんぢやねえ。器用に世間へ流して置けばそれでいゝんだ。それが俺らの手加減と云ふもんだ。考へてごらんなさい。何うせお師匠さんの本當の後繼ぎが出來るものぢやないんだから。」

お爺さんは少しでも激してくるとその顏をふら〳〵と左右に動かすのが癖だつた。そうして其の肩が四角に堅くなつて、其點にも興奮のあとの戰へを見せてゐた。今の若い女の心持が、少しも師匠の心に解めないと云ふことが、お爺さんには小癪なほどに腹立しかつた。

師匠にはお爺さんの其の言葉が一とつも氣に入らなかつた。今の世間は綺麗に淺く渡つて行けば好い世間かも知れなかつたが、師匠はそんな小利口でこの世間を渡つて來た人ではなかつた。自分だけではもつと眞劍にこの表面的な世間と戰つて、そうして浮いたり沈んだりして四五十年の生涯を苦しみ續けて送つて來た人であつた。他人は淺く器用に渡つて行く世間でも、師匠はどこまでも眞劍にこの世間を渡つて行かなくてはならないと考へてゐる人であつた。それと同時に養女の小藤も自分と同じやうに眞劍にこの世間を渡らせて行かなくてはならないのであつた。其れが一生藝によつて立つて行かうとする者の世間へ對する一とつの務めだと不二江は堅く信じてゐた。

だが不二江は、お爺さんから度々然う云ふ氣に入らない言葉を聞くと、默つて、たゞ口を閉ぢて小藤

への稽古も好い加減にしておいた。お爺さんの其の言葉が師匠のすべてを傷づけるやうに響いてくる時、師匠は唯寂しい心持でみんなの前へ默り果てた。今の若いものが、直きに僅な苦患にも涙をこぼす意氣地なさを、自分の昔に比べて冷嘲りながらも、師匠はもうそんな事も口にはしなかつた。然うして少しでも稽古が弛むと、直ぐと怠り勝ちになつて弟子の華江たちと他の話に心を騷がしてゐる小藤の樣子を師匠は遠くから冷めたく打守りながら、其れへの小言も云はなかつた。長い間苦しみぬいて自己を鍛へ上げて來た師匠の鐵のやうな意志は、一度一切を拋り出して堅く自分を閉ざして終ふと、その頑なゝ心は中々舊へは戻らなかつた。

お爺さんは斯うして不二江が默つてしまつたのを、小藤の爲に結句喜んでゐた。稽古の嚴しさが輕くなつてから、小藤は又元氣が出て、お爺さんの愛撫の手の中に自分から弄ばれるやうにして喧噪いでゐた。

「ねえ。華江さん。お爺さんは私に生命でもやると云つたの。あんなお爺さんの生命なんか貰つたつて仕樣がないねえ。」

鬘下地に元祿袖の上つ張りを着た華江が、師匠の化粧箱を掃除してゐる傍に立つて、小藤は後に居るお爺さんの方を見返りながら、わざと大きな聲で巫山戲るやうに云つた。然う云ふ時、お爺さんは着物の下前を引き摺りながら、片手で下腹を押へ〳〵、

「こいつめ。」

と云つて小藤を家中追ひ廻した。

四

名古屋の興行先きへ來てからは、お爺さんはまるで小藤の傍へも寄る事が出來なかつた。小藤は毎日師匠と一所に小屋へ行き、宿にゐれば始終師匠と同じ室に師匠に附添つてゐるので、お爺さんは師匠の目をぬすんで小藤を可愛がつてやる暇がなかつた。その頬を突いてやる機も見付け出す事が出來なくてお爺さんは夜も淋しい思ひをした。

お爺さんは晝はみんなと一所に樂屋へ行つて、小藤の鷺娘を舞臺裏から見物するのを樂しみにしてゐた。小藤は師匠の前で稽古をした時よりも、舞臺の方がずつと餘裕があつて立勝つて見えた。

「あれだけ大きく踊れりや結構だ。何うして、おつかさんそつくりと云ふところがあるぜ。藝と云ふものは不思議なもんだ。」

お爺さんは不二江がぷつつりとも其の舞臺に就いて口を利かないのを不平にしてゐた。不二江は好いとも惡るいとも云はなかつた。衣裳や鬘に目を通してやつたばかりで、その技藝の上では師匠は全く知らない顔をして過ごしてゐた。その默つてゐるのがお爺さんにはおもしろくなかつた。

「おい。賞めてやんねえよ。」

お爺さんが斯う勸めても不二江はやはり默つてゐた。不二江は賞めるどこではない。もつと小言を云ひ度い點ばかりが目に付いてゐるので、其れで何時も默つてゐるのであつた。其れでも小藤の鷺娘は評判が好くて、誰れもその美しいのを賞めそやしてゐた。

小藤は樂屋にゐても宿にゐても、不二江が相變らず苦い顔をして、唯ぢつと一とつ所に座つた儘で物も云はずにゐるのが切なかつた。華江はいつも一人で面白そうにしてゐた。樂屋にゐる時は黑衣を着たその裾の下から、一と筋赤い色がちらついてる姿で、きゆつと鬘下地に引き詰めて、甲斐々しく働いてゐた。華江はもう十年もこの師匠に附いてゐた。その十年の經驗で萬事を呑み込んで華江は一人で師匠の周りを切つて廻してゐた。

「お嬢さん。さあ參りませう。」

華江は朝も大層早くから小藤を誘ひ出して小屋へ行つた。鼻のすんなりとした赤い口許の締まつた、落した眉毛の痕から眼瞼の邊りのこんもりと高くなつた派出な顏立で、皮膚が綺麗にすべ〳〵と柔らかかつた。

「いつまでも恐い顏をしたお師匠さんの傍にゐるよりはさ、此邊でも見物がてら遊んで歩く方が氣が晴れまつさ。」

二人は長い袂を搖らつかせながら、みんなが珍らしそうに二人を見る賑やかな街を歩いて行つた。小藤は上品に、初心なお嬢樣氣質を見せた風で華江の後に隨いて歩いた。

「花雀さんのお宿はこゝらだなあ。」

華江はこの頃覺えた名古屋辯を使つて、淋しい裏町へ小藤を引張つて行つた。薄黑い鳥居の見える、石の玉垣の前あたりまで來てから小藤は足をとめて、そんな所へ行くのは厭だと云ひ張つた。

「何故に？　あんたも花雀さんが好きだとお云ひあしたになあ。」

「でも、こんな所を歩いてゐて、もし誰れかに見付かつて云ひ告けられたら叱られるから。いや〳〵。」

小藤は袖を掻き合はして急いで引つ返そうとした。

「まあ、そんな事恐がつて——苦界が片時なろかいなあ——だ。ほんとにお嬢さん、こわいんですか。

「えゝ、こわいの。」

「そんなお嬢さんだから旦那に可愛がられるんでせう。およしなさいましよ。あんなお爺さん。花雀さんにでも可愛がられた方が餘つぽど増しぢやありませんか。」

「知らん〳〵。」

小藤は顔を眞つ赤にして、兩袖で耳を押へながら驅け出した。

「お嬢はん。もしえ、お嬢はん。」

華江はわざと大きな聲で呼びながら、自分もはた〳〵と驅けた。

「まあ華江さんたら。およしよ。」

小藤は足を止めると、息を切つた下から怒りながら云つた。

「人が見るのに。見つともない。厭になつてしまふね。」

「あなたが驅けるから私も驅けたんですわね。どろぼう〳〵と云つて追つかけやしまいし、人が見ても平氣ぢやありませんか。」

「早く樂屋へ行きませう。」

「今から行つたつて、まだ花雀さんは來てゐませんから。」

「別にあの人が當てぢやないさ。好いから早く行かう。」

二人は又並んで、おとなしく歩いた。

小藤は花雀の事を思ひながら暫らく默つてゐた。昨日の晝間、舞臺裏から師匠の時姫を見てゐた時に、後から來て自分の眼を押へた人があつた。

「誰れ？　華江さん？　銀公かい。」

銀公なら厭だと思つて、引き斷るやうにその手を取つて放すと、其れが花雀だつた。

「誰れ？　華江さん？　銀公かい。」

花雀は小藤の云つた通りの口眞似をして、笑ひながら小藤の顏を見てゐた。二番目の狂言に出る若い手代の顏の扮へをして、羽二重で釣つてゐた。痩せた肩に、黑つぽい柔らかな褞袍の襷がするりと落ちかゝつてゐた。

小藤はそれを思ひ出した。その時の溫い指の感じが眼の周圍にぽつと射して來たやうであつた。小藤は思はずその美しい眼を瞬つた。

「何を考へ込んでゐらつしやる？　花雀さんのことでせう。」

「まあ、ほんまに好かん人だわ。華江さんは。」

「然う云へばね。」

華江が何を云ひ出したかと思つて小藤が聞いてると、男衆の銀公の事だつた。銀公はこの頃若い女房を貰つたばかりだのに、その女房を一人おいて別れて來た。銀公は此方に斯うしてゐても始終その女房

の事ばかりが氣になつて、毎日々々華江に端書を書いて貰ふと云ふことを華江は話してゐた。

「まるで正氣とは思はれないほど、女房さんのことばかり云つてますよ。涙をこぼすの、おどろくわねえ。」

「銀公が泣くの。」

「女房さんが戀ひしくなつて泣くんですよ。あなたにも一遍、銀さんの泣くところを見せて上げたい。だから宿の女中なんかにも始終調戯はれてゐるんですよ。毎晩遊びに出るんですつてね。」

「いやな銀公ね。」

二人はこんな事を云ひ合つて、やがて小屋の樂屋口を潜つた。

「おい華江さん。藤こうにあんまり惡るい智恵をつけたりしちや可けないよ。」

お爺さんは小藤と華江が一所に、何か笑ひ話でもしてゐる時には、直ぐに神經的にそれを咎めて華江に注意した。お爺さんは小藤を華江と一所にして置くのをよくないと考へた。こんな時を機に、華江が小藤にも自分の見て來たおもしろい世間を教へて、その何にも知らない小藤の初心な眼を惡るい方に開かさせるだらうと想像すると、お爺さんは氣が氣でなかつた。

「藤こう。華江と一所にそこいらを歩いたりしちや可けないよ。お前はあんなものとは一所になれない身分なんだから、あんなものゝお調子に乘つちや可けない。いゝかい。」

そんな時にはお爺さんは態と師匠の前で小藤を窘めた。

「華江はどうして、いろんなものを食つてる奴だから、迂濶りして預けちや置かれねえ。こつちはまだ眞のお嬢さんなんだから。」

お爺さんがそんな事を云つても、不二江は何時も默つて聞いてゐた。お爺さんの言葉に相槌も打たなかつた。宿にゐれば火鉢の傍に坐つて、不二江は靜に煙草をのみながら、皆のわさ〳〵と出たり入つたりしてゐるのを眺めてゐるばかりであつた。

「おい。お前たち。」

お爺さんは小藤と華江が一所にゐる時には、直ぐ聲をかけて二人の仲に割り込んできた。

五

花雀の話を華江から聞くのが小藤には樂しまれた。樂屋にゐても小藤はお爺さんの嚴しい監視で一と足も部屋から外へは出られなかつたから、花雀の部屋の樣子は華江からでも聞かなければ、小藤には思ひ察しる事も出來なかつた。

「花雀さんは本當にお嬢さんがお氣に入つたんですと。」

華江が斯う云つても、小藤は其れを眞實に受けて聞くほどの心の熱も持たなかつたが、唯、その人の噂を華江から聞いてゐれば、小藤は胸が明るくなるやうな氣がした。花雀がつまらない役者だと聞きながら、其れでも小藤は、一座の中で何となくこの男に惹かされた。

今迄の芝居は五日の日限りで明日からは新奇に二の代りが出るので師匠は今日は一日宿にゐた。朝から曇つて午後からは時雨が時々ぱらついた。小藤は華江が花雀の宿へ行つて見やうと云つて勸めるけれ共、それも心が咎めて、つい一日宿にぐづ〳〵と暮らした。

「晩にでも、そつと。」

華江がこんな事を未練らしく小藤に呟くと、小藤は其れは聞かない振りをして、そうしてやがて二人で宿の湯に入りに行つた。

庭下駄で飛石を踏みながら、宿の番傘を翳して池を渡つて行くと、紅葉の赤い蔭から湯殿の煙りが濃く立ち騰つてゐた。痩せた華江が裾を上げて俯向きながら小藤よりも先きに硝子戸を開けて中に入つた。今日はおばこに結んでゐるので額際が意氣に見える。小藤は自分だけは暫らく外にゐて、霜に素枯れた儘に咲いてゐる足許の黄色い小菊の花を眺めてゐた。女中が手拭を髪の上にのせて風呂場の横で水を汲んでゐたが、小藤を見ると愛想笑ひをした。

中では華江がもう湯に浸かつてゐた。

「おゝ寒――」

斯う云つた聲が湯氣に包まれてゐた。

「あの人は大層いゝ家の息子さんだつたのが、道樂で弟子になつて、あんな祿でもない役者をするやうになつたんですと。」

誰れの噂をしてゐるのかと思つたら、其れは花雀の弟子の操の話であつた。

小藤は默つて湯を流してゐたが、花雀があんまり好い役者ではないと云ふのが今も寂しかつた。お爺さんが何時も花雀のことを大根だと云つて嘲笑つてゐる言葉を思ひ出すと、小藤はその人と口を利くのも自分が安っぽい氣がしてくる。其れにもつと花雀を厭に思はせるのは、お爺さんが花雀のことを「銀張りの緣起物」見たいな奴だと云つた事であつた。

「いやに生つ白くつて、ぶつきらぼうで、藝に味も素つ氣も無えや。」

其れで小藤の戀は三文の價打もなくなつて、情が一層彈まなくなつた。

小藤は藝のない男の事を考へてゐると、今日の時雨日のやうに無暗と寂しくなつてきた。もう其樣人の事は思ひ捨てやうと考へて、わざと、不二江と同じやうに東京から加はつた×××と云ふ一流の役者や、その弟子たちの事を一人々々思ひ浮べて見ても、藝の立派な、好い役者の中には小藤の思ひの誘はれるやうな好いた人はやつぱり一人も見當らなかつた。

「華江さんは花雀さんが好きね。何うしたと云ふの。」

小藤は華江がひどく花雀に夢中になつてゐる事を思ふと、ふと自分の胸が艶つぽくなつた。

「ちよいと遊んで見たい樣な人だからでさね。お孃さんのやうな初心な方にはそんな味は分らないんでせう。」

華江が冷かしながら笑つた。

「あゝ、分らない。」

急に小藤は嬉しくなつた。自分の身體が誰れかの掌に載つかつて、その儘ころ〳〵と弄ばれるやうな

心地の快い面白さと嬉しさとが混つてきた。小藤は湯を出る時に華江の裸の脊中を平手でぴしやりと打つて笑つた。

「まあ、好かないお嬢さん。」

華江が云つてると、

「又、花雀さんの話をしてますね。誰れが岡ぼなんです。」

と窓の外から銀公が平つたい顔を出しながら聲をかけた。

「銀さん。いけないよ。覗いちや。」

「華江さん。又、端書を書いてくれませんかね。」

「おかみさんの所へかい。」

「えゝ。」

銀公は硝子戸へぴたりと顔を押し付けながら云つた。

「内職をして稼いで待つてゐておくれよ。心變りをしては厭だよ——端書の文句は定まつてるぢやないか。幾枚書くのさ。」

「然うぢやありませんよ。今度は歸る日を然う云つてやるんですから。」

「まだ、何時歸るんだか定まつてもしないのに。」

小藤も湯の中で笑つた。

「おかみさん孝行だねえ。」

二人が賑やかに笑つてゐる聲の響きの消えない内に、硝子戸の外でお爺さんの聲が聞こえた。
「おい。なんだ。そんな所に立つてるもんぢやねえ。おい。銀公。」
お爺さんは甚く怒つてゐるやうに戰える聲に力を入れて、獸でも逐ふやうにどんどんと下駄で土を蹴つてゐた。
「おい。お前たち。呆れて物が云へないな。」
やがて硝子戸を開けて入つて來たお爺さんは二人を見ると直ぐに怒鳴つた。
「あんなものを相手にして、お前たちは何にも知らねえのかい。あれは色氣狂ひだ。好ひ氣になつてあんなものを相手にしてゐると何を爲るか分らねえ。圖に乘つて何をするか分らねえんだ。あれは馬鹿なんだから。」
湯氣が白粉の匂ひを含んでお爺さんの顏に繞つてくる中で、お爺さんは癇を起しながら怒鳴りつゞけた。
「何を云つてるの。銀さんは華江さんのところへ端書を賴みに來たんですよ。」
「それなら宜いがね。今聞いて來たことがあるから、俺が嚴しく云ふんだ。もう一切、小屋の歸りなんぞにあんなものと一所に歸つて來たりしちや可けないよ。いゝかい。」
お爺さんは、風呂の中から此方を覗いてゐる目の大きな小藤の例の顏を見ると、心が安まつてきた。
「彼奴が何をするか分らねえ。みんなに彼奴は調戯つたやうな事はなかつたかい。」
「えゝ、別に。」

華江が低い聲で返事をした。

「藤こう、お前にもなんにも惡るい事はしなかつたかい。」

「何にも爲やしませんよ。銀さんが何うしたつて云ふの。銀さんこそ好い面の皮だわね。可哀想に。」

「其れなら好いんだよ。お前は何にも知らねえんだから。」

お爺さんはさつき宿の主婦から銀公の話を聞いた時、直ぐに若い女たちの上を思つた。貫ひ立ての女房が戀しくつて晝も夜も其ればかりを云ひ續けて涙をこぼしたりしてゐると云ふ銀公の甲斐性なしを怒るよりも、然う云ふ色に氣狂い染みた男が、若い女に何を爲るか分らないと云ふ心配の方が先きに立つた。銀公は東京へ逃げて歸るやうな事があるかも知れないと云つて、主婦はお爺さんに注意したけれ共、お爺さんは此方から今夜にも銀公を東京へ歸して了はうと考へた。

「若い女が二人もゐるんだから、どんな馬鹿をされても仕方がない。彼れ等にもよく云つて置かなきや。」

お爺さんは斯う思つて急に二人を探したが、二人は離れにも見えなかつた。

「彼奴が何をするか分らねえ。」

お爺さんは、小藤がもうすつかり銀公に唆かされてるやうな氣がして、ひら〳〵とした。小藤の眼の猥らな笑ひは、誰れに向けても漏らすやうに思はれた。お爺さんの記憶の中から、淫奔な小藤のさまざまな媚びた姿態が絶えず現はれてきて、お爺さんの胸は燃かれたやうにちりつとした。みんなが夜る遲く小屋から歸つてくる時、可愛らしい艶麗な小藤の後ろから、平つたい口の大きな鈍な顏をした銀公が黑衣の兩袖を突つ張つて隨いてくる馬鹿氣た樣子が、お爺さんの目にあり〳〵と映つた。お爺さんは少

つとの間も猶豫をしてはゐられないやうに焦燥つて小藤を探し歩いた。――

「銀公はもう歸して了ふんだ。」

お爺さんはそろ〳〵と外に出て行きながら咳いてゐた。

「且那のあの怒りやうと云つたら、あれも正氣ぢやありませんね。たしかに。」

華江は「色氣狂ひはそこにも一人居る。」と云はうと思つたが、お爺さんが外に居て二人の樣子を聞いてゐるかも知れないと考へて口を噤んだ。

だが小藤は、お爺さんが可哀想に思はれたので華江の言葉の後には付かなかつた。血走つたやうな今のお爺さんの窪んだ眼を考へると、小藤は悲しくなつた。華江は、銀さんは女房さんが戀いしいばかりで色氣狂ひでも何でもないと、外へ聞こえよがしに大きな聲で繰り返してゐた。

「でも、何でも、あなたは旦那が好いんだから不思議ですね。」

華江は暫らく默つてゐた後で、斯う云つた。小藤は其れに返事をするのが厭になつたので、白粉もつけずに、髪をきゆつと搔き上げながら上にあがつた。

「もうおあがり。」

「お先き。」

小藤は湯上りを引つ掛けて外に出ると、番傘をさしたお爺さんが井戸端のところに立つてゐた。右の手を懷中に差し入れて、革の止め帶を內から押へながら、庭下駄から引き摺るやうに着物の上前を下げた儘で、小藤の出て來た方へ寄つてきた。

「待つてゐたの。」
「好いから早く來ねえ。」
お爺さんは小藤の湯熱りのしてゐる手を取つて自分の傘の中へ入れてやつた。
「お前はなんだつて華江なんぞと花雀の話をしてゐるんだ。外聞ねえ。」
「私がしたんぢやないけれど、華江さんの方で爲りや仕方がない。」
「だから可けねえと云ふんだ。もつと氣の利いた男の噂でもしねえ。なんだ。あんな下らない男の噂をしやがつて。」
お爺さんは肱を張つて小藤の手を引つ張つて行つた。せか〳〵と、足許の危ない後に隨いて、小藤は溫和しく靜に歩いた。池の彼方の燈籠の灯がぽつと紅に浮いてゐる程、暗い夕暮れになつた。

六

二の代りが三日間で濟んで、一座は今日が打ち止めの日であつた。樂屋では忙しそうに部屋々々の男衆たちが荷を纏めたり、廊下を往つたり來たりしてゐた。その晩直ぐに大阪へ立つ人や、美濃へ廻る人などがあつた。
「えらい失禮をいたしました。何れ東京へ行つた節にはお立寄りいたします。」
暗い廊下で、小藤のよく見覺えてない人に斯う云つて挨拶されて、小藤は急に寂しい心持になつた。
小藤は窓の障子を開けて、この一週間ほど目に馴染んだ稲荷の祠を眺めた。赤く塗つた小さな玉垣に

はいろ〳〵な役者の名が記してあつた。小藤はこの部屋にゐる間に退屈をすると、障子を開けてはその名を讀んだ――雨は寒く風に荒れながら祠の廻りに降つてゐた。雪にでもなりさうに、氷つた暗い空を仰ぐと、白い鳥が一羽雨に濡れながら飛んで行つた。

部屋の中は華江がもう大方片付けて終つて、師匠の鏡臺の上もがらんと淋しい風情をしてゐた。小藤が洒落に着た黑衣も綺麗に疊んで、荷の上に乘つてゐた。窓の敷居が朽ちて、壁の暗い煤けた部屋を小藤の名殘りに照らすやうに、灯が今日は早く點いてゐた。小藤は胸の底から輕く涙を絞られるやうに、その部屋をなつかしく眺めた。華江がちよいと居なかつた間の、さつきのお爺さんの執拗い愛撫が、今も堪らない苦しさを小藤の感覺の上に殘してゐて、小藤は一層陰欝になつてゐた。もう沈み切つた暗い心持――小藤は涙が落ちて來たので其れを袂で拭いたが、其れは人に見られるのも極りが惡るいと思つて、あわてゝ煙管を取り上げた。

「東京へも歸りたくない。」

小藤はもつと、旅から旅へ歩いて行つて見たかつた。師匠にもお爺さんにも離れて、たつた一人で皆な行く方へ隨いて行つて見たかつた。一週間の旅の間に、小藤が遠くから眺めた一座の人たちの生活は、みんな華やかに面白そうで、自分よりはもつと好き自由に見えた。其の人たちの歩いて行く先きは非常に明るく、澤山に派出な事があるやうに思はれて、小藤は誰れと云ふ事もなく、今別れて行く人たちの明日の日に憧れた。師匠夫婦に隨いて暗いところへ引つ返して行く自分を思ふと、小藤は陰氣になつた

「お孃さん。ちよいと。」

入り口で華江の呼ぶ聲がしたので立つて行くと、戸の傍に花雀の弟子の操と二人で華江が話しながら立つてゐた。

「もうこれでお別れでござんすね。」

操が膝のところに手を置いて脊の高い小腰を屈めながら小藤に云つた。

「えゝ。」

小藤は目元に可愛らしいしほを作つて、唯微笑した儘で手を束ねながら其所に暫らく立つてゐた。

「然う。私も行きたいわね。」

華江が今の話の續きから、何か考へながら操に云ふと、

「構はないから入らつしやいな。師匠の手だけで行くんですから、私が師匠に話して上げますわ。女形がなくつて困つてゐるんですから、丁度好いでせう。新派をやるんですつてね。田舍だから面白いでせう。」

「そうして何日からなの。」

「明後日初日が出るんですつてね。此所から近いんですつてね。新派だからあなたなんかはきつと好いでせう。何方にしたつて一人ぐらゐは構はないんですから。」

操が優しい表情をその眼に保たせながら、一々身體を振つて話してゐた。小藤は何の事なのだらうと思つて、その話に聞き入つてゐた。

「何うせ私はもうお師匠さんの方の身體が明くんですからね。お師匠さんの方は構はないわ。私、行き

たいわねえ。一寸儲かるでせう。お小使が出來るわねえ。」
「えゝ其れはね。眞逆、只使ひつて事はありませんわね。ほんとに一寸儲けに入らつしやいな。」
「出し物はなんなの。」
「乳兄弟ですつてね。其れで妹を演る人がゐないんでね、困つてゐるやうですよ。だから丁度好いんですわね。あなたが行ければね。」
「君江を花雀さんがやるんでせう。」
「えゝ。まあ、然うでせうね。」
操は誰れか來たやうに思つて、振返ると師匠の花雀が半七の扮裝の儘で此方へ來た。
「へん。お邪魔を申します。」
花雀は紅のついた小さな口から、太い聲で斯う云つて通り過ぎて行つた。少し奥のところに小藤の立つてゐる姿を見付けると、行き過ぎてから足を止めて暗ひ中から小藤をぢつと見て笑いながら會釋をした。
「さあ。さあ。」
操は急いて師匠の湯呑を取りに部屋へ引つ返して行つた。
「ほんとに嬉し。」
華江は小藤に云ひながら、溢れてくる笑ひが我慢ができなかつた。
「私、行かして貰ふ。歸りがけの一と仕事でね。大しやれだわ。其れにね、花雀さんとなら只だつて構

はない。」

華江は胸を叩いて云つた。

「芝居をやるの。」

「えゝ、此所から近いんですつて、在ですつてさ。五日やるんだつて。何かお祭りがあるんでね。其所から買ひに來たんですつて。新派のやれる安手なところと云ふんでせう。」

「おつかさんが宜いつて云ふかしら。」

「可けないつたつて構やしない。此所が濟めば此方の身體ですもの。斯うしてゐりや給金を貰ふから、眞逆そんな不義理も出來ないけれども、身體が明けば私の勝手ですさ。お嬢さんもおいでなさいな。」

小藤は華江が羨しくてならなかつた。操が湯呑みを持つて、急いで通つて行つた。

「おつかさんのお園を見てちかうと思つて忘れちやつた。」

小藤は上草履を突つかけながら廊下に出た。華江を連れて舞臺裏まで行かうとすると、華江は花雀のゐる花道の揚幕の方へ行つて見やうと云つて小藤を奈落の方へ引つ張つた。

「お爺さんに見られると大變だから。」

小藤は云ひながら華江に片手を押へられて、自分も其の儘奈落へ下りて行つた。身體を屈めながら眞つ暗な底を通つて、又梯子を上ると、急に明るい電氣の光りが頭の上から射して來た。そこに花雀が煙草を吸ひながら腰をかけてゐた。

「誰れかと思ふたら。」

花雀が後にゐる操を見ながら云つて笑つた。

「おゝ。しんど。」

三勝の扮装をした吉之助が、衣裳の裾を高々と引き上げながら直ぐに二人の後から上つて來た。小藤の前を、

「ごめん。」

と云つて通つてから、紅を射した眼を流し目にして、

「不二江さんのお娘子さん。」

と云つて小藤の顔を凝つと眺めた。

「容貌が美うて、おとなしうて、藝か好うて。」

ほんとに好い娘さんだと吉之助は花雀に云つてゐた。花雀は其れを聞くと、默つて小藤の方を見返りながら微笑した。

「行きませうよ。」

小藤は華江を促しながら「左様なら。」と云つて梯子を下りた。華江は後から隨いて來ないので、小藤は一人で暗い奈落の底を通つて舊へ戻つて來た。もう酒屋の舞臺を見るのも厭になつて、小藤はぼんやりと部屋へ歸つてくると、

「おい。何所へ行つてるんだい。」

とお爺さんが部屋の中から怒鳴つた。

「何故然う、そわ〳〵してるんだよ。少し落着いてゐないかい。」

お爺さんの其の言葉が小藤は何時になく腹が立つて、物も云はずに窓の障子をがらりと開けて雨の降る外を眺めてゐた。雨に交ぢつて木の葉が祠の上に吹き付けてきた。ぞつと戰えるやうに雨の風が小藤の身體に染みた。

「おい。寒いぢやねえか。」

小藤は然う云はれて又びしやりと障子を閉めた。

「何を不機嫌な顏をしてるんだ。ひとの氣も知らねえで。」

お爺さんは小聲で云ひながら、かち〳〵と戰える手の先きで火鉢の火を弄つてゐた。

「華江につまらない智惠なんぞを付けられちや可けねえぜ。」

「なんにも知りやしないのに。」

小藤は樂屋の風呂で顏でも洗つて來やうと思つて鏡の上に掛つてゐた手拭を取つた。

「華江さんは自分の勝手で芝居を打ちに行くんだから。」

「何を。」

お爺さんが聞き咎めて顏を差し出した。

「華江さんがね。」

小藤は斯う云つて聲を張り上げると、涙が突つかけてきたので、其れを呑みこんでから

「花雀さんの一座へ入つて田舍へ行くんですとさ。新派をやるんだつて。」

「へえ。自分で定めたのかい。」
「何うだか、そんな事は知らないけれど、華江さんは氣儘が出來て好いと思つた。何所へでも芝居をしに行かれて。」
「其れが羨しいのかい。」
「私なんか何時になつたら然うなれるんだか分りやしない。」
「然う云ふ分らない事を云ふ——だからお前は可けねえと云ふんだ。」
お爺さんは氣が昂ぶつて來たので、聲ばかり戰えて口が利けなくなつた。少しも自分の身分を考へることの出來ない小藤を、お爺さんは打ちのめして遣り度い程に腹が立つた。
「能く考へて見ねえ。お前と華江と同じになるのか——おい。お前は兎に角痩せても枯れても不二江の娘だぜ。あんな花雀見たいなものと田舍の在を安芝居を打つて歩かれるものぢやねえ。お前には立派な株があるんだ。其りよ、無暗に安い給金でお前の身體が曝されるもんぢやねえ。芝居が演たけりや食傷するほど遣りねえ。お前が厭だと云つても遊んで置かせやしねえから。それもも少しの辛抱さ。いまに泣き度い程芝居を演らなくちやならない樣になるんだ。」
「そんな事を考へてるんぢやない。」
小藤は斯う思つたけれ共、言葉には出さなかつた。
お爺さんの云ふやうに、「不二江の娘だ」と云はれる事が小藤には窮屈でたまらなかつた。小藤は何所までも自分は自分で立つて行きたかつた。然う云ふ卑小な名目に縛られて、壓し付けられてゐるよりは、

小藤も華江と同じやうに、自分の意志の儘に爲たい事を爲て過ごして行きたいと思つた。

「何所にも廣い世間がある。」

小藤は今度の旅で、一層それがよく解つたと思つた。

「何を考へてゐるんだよ。」

お爺さんは小藤が默つてゐるので然う云つて聞いた。

無邪氣な初心な性質だと思つて「形ばかり大きくつても小供のやうな氣でゐやがる。」と云つて可愛がつてゐたお爺さんは、小藤が其の小供つぽさをだん〳〵に失くして、そうして兎角自分の事ばかりを考へやうとしてゐる其の他人らしい心持を見せるのが味氣なく思はれた。其れも華江が惡るい智惠を付けて、小藤を唆かすからだとお爺さんは華江を憎んだ。

「華江と云ふ女は、何か彼にか他人を搔き廻してゐる女だ。」

とお爺さんは大きい聲で云つた。

「なにも華江さんの知つた事ぢやありませんから。」

「其れぢや何うしたと云ふんだい。花雀と一所に芝居が演りてえのか。」

小藤の眼から涙がぽろ〳〵と落ちた。お爺さんは小藤のその涙を見ると、感情が柔らかになつて、胸がすつとした。

「お前は世間見ずだから、何でも俺たちの云ふ事を聞いてゐれば好いんだ。おれもお師匠さんも年を老つてるんだからお前一人が賴りだ。お師匠さんは氣むづかしい事は云つても、矢つ張りお前ばかりを當

てにしてゐるんだ。お前も其れを考へたら、輕忽な事は出來ねぇんだよ。」

小藤はお爺さんのその言葉が、嘘のやうな氣がして心では嘲けつてゐた。殊に自分ばかりを見詰めてゐる師匠の冷めたい心は、此方でこそ頼りも少なかつた。小藤はお爺さんの猥らな愛撫を心に浮べると、一途に厭はしくなつて部屋を出た。

「何時までこの人の玩弄になつてゐるものか。――」

ふと振返るとお爺さんは淋しそうな顏をして俯向いてゐた。

七

明日の一番で東京に歸ることに定めて、師匠は一二軒別れの挨拶に一人で出て行つた。お爺さんは小藤を連れて熱田の社へ參詣に行かうと勸めたけれ共、小藤は頭が痛いと云つて斷つた。お爺さんが心を殘しながら出て行つてしまつてから、小藤は嘘ではなく頭痛のする身體を横にして、靜に日の射す離れに寐てゐると、華江が歸つて來た。

華江は一人花雀の一座の中に交ぢつてその興行に加はる事に師匠から許しが出たので、今朝も早くから花雀の宿へ稽古に行つた。眉毛を黛で薄く描いて、髮も束髮に結んで奇麗に化粧をしてゐる華江は、今初めて其の姿を見た小藤の目にひどく美しく上品に映つた。小藤は華江に起されながら其の姿をぢつと眺めた。

「何を寐てなんかゐらつしやるの。この忙しいのに。」

「華江さんとは違ふさ。私は明日東京へ歸るんだもの。」
華江は鏡臺の前に行つて顏を映して見てから、そこで顏を直して又小藤の傍へ戻つて來た。
「ほんとに奇麗な顏をして。誰れだつて見染めさうね。」
「ありがたう。」
華江は嬉しそうに、一人で微笑んでゐた。小藤は「花雀さんの話ならしないでくれ。」と斷つてゐながら、華江を見ると宿での稽古の話が聞きたかつた。
「もう餘つ程稽古をしたの。」
「えゝ。乳女の家のところだけね。造作はないの。花雀さんはこんな物の方が好いんですよ。ずつと仕舞ひまで臺詞の受け渡しだけしてきたんですよ。」
華江は云ひながら、自分の荷物を纏めてゐた。鞄が一とつに小さな袋が一とつと、洋傘もそこに揃へておいた。
「晩に出立つんですつて。ですから私は兎に角荷物だけ置いて來ませう。お師匠さんには又夕方でも御挨拶に來ることにして。」
華江がそわついてもう出て行かうとして居るのが小藤には物足りなかつた。花雀の宿が頻りになつかしくなつて、小藤は華江と一所に行つて見たくもあつた。
「華江さん。送つて行つて上げやうか。」
「ほんとですか。其れなら入らつしやいな。實は花雀さんにあなたを連れて來るやうに頼まれて來たん

ですよ。でもあなたは行かないだらうと思つて默つてゐたんです。お出でになりますか。」
「然うね。」
小藤は然う聞くと躊躇はれた。其れに髮もこわれて居た。二人の留守に無斷で外に出ることも思ひ切り兼ねて小藤はぐづ〳〵としてゐた。
「さあ。早くさ。どつちともお決めなさらんか。」
小藤は花雀の宿へ行くのに、昨日まで通つてゐた芝居小屋の前を通ることを考へた時に、ふと氣が進んで急いで仕度をした。
「私も今日はこの土地にお別れだから、少しは外を歩いて見たい。ねえ華江さん。」
「ほんとに然うですとも。」
華江は鞄の傍に坐り直して小藤の髮を結ふのを待つてゐた。
「お嬢さんも行かれると好いんですのにねえ。割合にお給金が好くつて私もぴつくりしたんですよ。東京へ歸つて苦勞するのも詰らないから、ずつと花雀さんに隨いて京都の方でお正月でもしやうか知ら。」
華江が考へながら云つた。小藤は自分も髮を束髮にして着物を代へて華江と一所に出た。華江に浮かされたやうな捨鉢な氣持になつて、小藤は暖な冬の日を眩しく仰ぎながら華江と歩いた。華江は鞄を持ち、小藤は袋を持つてやつた。
「私もこの儘何所かへ行つてしまひ度い。」
「何所へ？」

「そんな事は自分にも分らない。」

二人が默つてから、

「ほんとにお師匠さんは嚴ましいから、若いものは居付きませんね。今までだつて隨分養女を世話した人もあつたし、二三人も彼家に貰はれて來たんだけれど、みんな出て行きましたよ。私も最初はそんな話があつたけれ共、旦那が癖が惡るいと云ふ事を聞いて恐身を震つてしまつたんですよ。」

小藤は華江の言葉が氣に觸つたので何とも云はなかつた。

「この人は何時でも餘計な事を云ふ。そうしてはおつかさんに何でも能くべら〳〵と云ひつげる人だ。」

小藤は華江の端無い心を卑しみながら斯う思つた。小藤とお爺さんとの間を華江が事々しく師匠に告げた事があつたが、師匠は其れを取り合はなかつた事を小藤は思ひ出してゐた。華江はまだ一人で師匠が年を老るほど一層小言ばかり嚴ましくなつて煩さい事などを話し續けてゐた。

「お師匠さんも豪いかも知れないけれ共、もう時勢後れでね。今の世の中はもつと新らしくなくつちや駄目だわ。時代が全で違ふんですもの。お師匠さんに附いてばかり居ると私も後に殘されるから。迂濶りしちやゐられない。」

「華江さんはこんな事を考へてゐる。」

と小藤は思つた。師匠を裏切つて行く華江の心を、小藤は憎まないではゐられない樣な氣がした。

小藤は其れで自分のこの間からの考へを、もう一度自分で繰り返して考へて見た。そうして自分は華江さんのやうな襟元に付く根性で師匠やお爺さんと離れて行かうと思つてゐるのではないと云ふ事が、

自分の心にはつきりと解つて小藤は心を安めた。小藤の心には自分だけを好くしやうと考へてゐる樣な然うした利己的な片影は少しもなかつた。だが小藤は師匠の藝にも服してゐたし、師匠の大きな心も尊んでゐたし、其れからお爺さんの愛にも喜びを持つてゐるのに、其れにも抱はらず、師匠やお爺さんの手を離れたいと考へるのは、やつぱり華江のやうに卑しい心があるからではないかと思ひ繰り返したが、小藤は自分で、何うしても自分の考へは正しいやうに思はれた。自分が、今直ぐに師匠の傍から離れて行く事があつても、其れは華江さんの輕薄な考へと同じではないと、小藤は堅く思つた。形式は離れて行つても、自分の心は何時までも師匠やお爺さんを思ひ慕ふに違ひないと、藤には考へられた。

「それ。もう來ましたわ。」

華江が云つて宿へ入つて行つた。小藤は此所まで來ると、内へ入る氣もしなかつたが、無理に華江に引き上げられて花雀の部屋へ通された。

金緣の眼鏡をかけた花雀が、何にも爲ずに火鉢のところに坐つてゐた。膝の前には長い手紙が長々と散らばつてゐた。隣りの室には三四人集つてゐるやうに賑やかな男の聲がした。

「おや。何う云ふ譯で。」

花雀が懷手をした儘で小藤を見ながら笑つた。荒い紫の棒縞のお召の褞袍を花雀は引つかけてゐた。

「無理に引つ張つて來ましたよ。」

華江は花雀の傍に坐つて、花雀の卷煙草入れから煙草を一本拔き出して云つた。

「お入りなさいまし。藤さん。」

花雀が手を叩くと隣室から眞つ赤な笑い顔をした操が出て來た。花雀は其れに茶を取りにやつて、
「碌におつかさんにも御挨拶もしませんで、えらい失禮をいたしました。東京へは何時お立ちです。」
「えゝ。明日の朝。」
小藤は赤くなつて云つた。
「これは大阪から來た手紙ね。藝者でせう。」
華江は手紙を取り上げて、片手で巻煙草の灰を落しながら、片手で手紙をたぐり〳〵讀んでゐると。
花雀は其れを突然に引つ奪つた。
「まだそれほどの仲ぢやおまへん。お返し。——」
華江は其れを聞くとついと立つて隣りの室へ行つた。
「仕様のない阿婆擦れで驚き入りますわ。あの女は。」
花雀が小藤を見て冷笑した。
「あんた、もつと此方へお寄り。御悠くりお遊びなさいな。」
「でも、遲くなると叱られますから。」
「初心らしい事を云ひなはるな。あんたお幾歳。」
「えゝ?」
小藤は默つて微笑した。
「その初心らしいところが價打ですわ。私はきつうあんたを好いてますよつて、何卒御遠慮なう此方へ。」

花雀が眞つ白な腕を延ばして、小藤の手を取つてぐいと引き寄せたが、小藤は其れを振り拂つて、强情に傍へ行かなかつた。

「きつい情無しさんや。」

花雀が、花片のやうな口許に笑ひを含んで云つた。

「左樣なら、又。」

小藤は急に立上つて廊下に出た。階下へおりて薄暗い宿の帳場まで來ると、後から華江が追つて來た。

「お歸んなさるの。お師匠さんに宜しく。」

小藤は其れを見返りもしないで急いで其家を出た。

宿へ歸ると、先刻戻つて來た師匠の不二江が一人で明日の荷を拵へてゐた。小藤を見ても、師匠は何所へ行つたとも聞かなかつた。

「華江さんが自分の荷物を持つて行きました。」

「然うかい。」

不二江は默つて、小さな包みを袋の中に入れてゐた。

夕方華江が來た時に、小藤が一所に花雀の宿へ行つた事を、つい其の話の間に出したので、小藤は後になつてお爺さんにひどく怒られた。

「仕樣のねえ奴だ。何うしたと云ふんだい。」

お爺さんは、其れを不二江に知らせまいとする樣に、深い注意をしながら小藤に怒つたが、不二江は其の話を聞き知つて、默つて小藤の顏を見ながら笑つてゐた。

「花雀の何所がいゝんだい。馬鹿め。」

小藤はいくらでもお爺さんの怒りに對して耐える事が出來た。小藤は執念く物を云はなかつた。

「花雀も又、仕樣のない女つたらしだからなあ。華江の奴が好い氣になりやあがつて。彼女はもう首にしちまはなくつちや可けねえ。何を仕出來すか知れたもんぢやねえ。をい。お前も確りしなくちや駄目だぜ。」

小藤は何時までも首を垂れて默つてゐた。

八

停車場の待合室から、霜の深い朝の町を眺めて小藤が寒そうに襟卷に首を埋めてゐると、華江がふつと入つて來た。

「一所になりましたわね。私たちも今朝彼方へ行くんですの。花雀さんと二人ぎりですけれどね。」

小藤は立ちもしずに、華江の樣子を眺めてゐると、華江は傍にゐる師匠の不二江を見付けて、其の方へ挨拶に行つた。

「又お目にかゝれて、ほんとに宜う御坐いました。」

華江が大きな聲で云つてるのが聞こえた。其所へお爺さんが外から入つて來たが、お爺さんは華江には挨拶もしないでゐた。華江は又、小藤の傍に來て、其所に腰をかけた。

「昨夜はあなたのお蔭で叱られた。」

小藤は笑ひながら華江に云ふと、

「然う。彼所へ來た事で？　其れは惡るいことをしましたわね。あなたも又叱られて默つてゐるから、始終叱られるんですわ。少しは此方からも云つてやらなきゃ。」

華江は、毛のショールに括まつて、其の上に大きなマントで身體を包んでゐる師匠の方を暫と見て小聲で云つた。

「花雀さんも然う云つてましたよ。あんなにして居て何うなるんだらうつて。あなたの事を然う云つてましたよ。」

華江はふと待合室の外に花雀の姿を見付けて、其方へ出て行つたが何時までも二人はこの室へ入つて來なかつた。

「何所にだつて廣い世間はある。何時だつて廣い世間へ出て行かれる。私はもつと大きな世間　出て行きたい。」

小藤は花雀や華江を侮蔑しながら心で繰り返してゐた。お爺さんや師匠と一所に東京へ歸つて行くことが小藤にはもう鬱陶しくもなかつた。

「おい。もう行くんだぜ。」

お爺さんが聲をかけたので小藤は不二江の後から隨いて出た。花雀や華江の姿はそこいらに見えなかつた。